

文学

イ コンジェ
李建濟 (立命館大学コリア研究センター)



ファンジョンヨン
黄鍾淵 編

『文学と科学 I - 自然・文明・戦争』(ソミョン出版、2013年)

황중연 편 『문학과 과학 I - 자연·문명·전쟁』(소명출판, 2013)

東国大学文学部国語国文学科の黄鍾淵教授は、文系学問と理系学問との連携を目指した近年の一連の企画を主導してきた人物である。2012年2月3日から4日にかけて同大学校文化学院において開催されたシンポジウムもこの一連の企画の一環であったが、本書はこのシンポジウムの際に発表された論文を元としている。本書では、西洋科学が韓国の近代文学を成立させた知的土台の重要な一部であったこと、西洋科学的な認識や方法の模索が植民地期における文学の新たな路線あるいは近代主義的な路線を形成していたこと、などが述べられている。また、科学の諸般分科に由来する各種知識が人間表象、叙事技法、ジャンル形成といった文学の主要局面に及ぼした影響についても説明している。

第1部「文学と科学との接点」では、李光洙のテキストを用いて、韓国近代文学史の主要な瞬間において、科学理論と文学実践とがどのように接触していたかが考察されている。1910年代にとりわけダーウィン(C. Darwin)やヘッケル(E. Haeckel)を通じて李光洙が成し遂げた知的、文学的革新が、当時の人々が自然や人間を理解するにあたり、科学主義的な転回の性格を有していたことを、黄鍾淵は「神なき自然」において示した。李守炯は「1910年代における李光洙文学と感情の形象学」において、1910年代から議論されるようになった「情」または「感情」についてのディスコースが心理学的、神経学的知識に依存していた状況について把握したうえで、初期の李光洙小説に見られる強烈な感情体験の神経病的症状を把握し、ジェンダー化され、道徳化された感情理解方法について分析している。徐熹源は「『朝鮮の未来』あるいは文明と科学の叙事」において、李光洙が科学という名で追及した知識や規律の中心に、経済学が位置していたことを明らかにした。李喆昊は、李光洙がベルクソン(H. Bergson)的、ジェームズ(W. James)的時間心理学にしたがって、一種の「意識の流れ(stream of consciousness)」を先駆的に示していたことを明らかにした。

第2部「科学という理想、普遍という偶像」では、科学としてのマルクス主義が文学や学問の領域においてどのように作用していたのかについて、文学批評や歴史研究の例を用いて明らかにしている。宋敏昊は「カップ(KAPF、朝鮮プロレタリア芸術家同盟)初期における文芸論の展開と科学的理想主義の影響」において、1920年代前半における朴英熙の、オイケン(R. Eucken)の新カント主義から堺利彦の歴史唯物論に至るまでの「科学」的批評の知的源泉を確認しつつ、彼の科学主義が内包していたジレンマについて明らかにした。車承棋は「事実、方法、秩序」において、科学的認識という点でマルクス主義とモダニズムにはどのような共通点があったのかを明らかにするとともに、1930年代後半に入り厳しさを増していったファシズム体制のもとで、科学が技術工学的理性に限定されるようになった経緯

について説明している。鄭鍾賢^{チョンジョンヒョン}は「檀君^{ダンゴン}、朝鮮学、そして科学」において、「朝鮮学」の脈絡において、科学とは朝鮮人の歴史的経験を普遍化するディスコース体系のもう1つの名前であったことを明らかにした。

第3部「科学的想像力と文明のスキャンダル」では、文学テキストの範囲を越えて、より広い領域での歴史資料の分析を通じて、韓国人の科学技術経験の事例を分析している。申知瑛^{シンジヨン}は「外から来た科学、内から噴き出した『ウワサと反応』たち」において、朝鮮人一般が初めて科学文明を経験した時期、ウワサや風説のかたちで科学文明が広まっていったという状況に着目し、このようなかたちにこそ、科学文明の受容や専有の特別な方式が潜んでいたのではないかという仮説を提示した。宋明珍^{ソンミンジン}は「1920年代における科学小説の受容様相に関する研究」において、1920年代半ば、ウェルズ（H. G. Wells）の『タイムマシン（*The Time Machine*）』を翻訳する試みが短命に終わってしまったことを手掛かりに、韓国において科学小説が発達しなかった理由について考察している。韓敏珠^{ハンミンジュ}は「科学戦の時代、銃後女性と人造の想像力」において、科学と文化との、技術と規律との関係については、ジェンダーを媒介にして考察すべきであると主張するとともに、戦時のいわゆる「銃後女性」生産は代用品工学の一種であったという解釈を示した。権ボドゥレ^{クオン}は「科学の零度、原子爆弾と戦争」において、アジア太平洋戦争を通じて原子爆弾が極めて大きな威力を持つことが証明された後、南北朝鮮で呼び起こされることになった夢と悪夢、ビジョンと幻想を追跡した。

第4部「近代科学の原初的場面」では、韓国において科学ディスコースが誕生した過程についての理解を深めることが目指されている。金成根^{キムソンゲン}は『『科学』という日本語語彙の朝鮮伝来』において、明治時代の日本において「サイエンス（science）」の訳語として登場した「科学」という単語が、開化期に入り日本に留学した人々によって韓国に伝えられ、理解されていった経緯を明らかにした。李勉雨^{イミョヌ}は「初期日本留學生の学会活動を通じた科学文化への寄与」において、日本に留学した朝鮮人が朝鮮の近代的科学言語や科学文化を作り上げるうえで大きな役割を果たしたことを確認している。趙亨来^{チョヒョクネ}は「学会誌のサイエンス」において、「科学」という用語が持つ意味の1つである「分科学問」という観念が、ニュートン（I. Newton）的科学的構成概念とともに、朝鮮にもたらされていたことを明らかにすると同時に、朝鮮における科学ディスコースの開始と朝鮮の国民国家体制への編入とが同じタイミングでなされていたことを説明している。

黄鍾淵によれば、近代韓国において科学が受容され、経験され、探求された歴史を見ることは、近代文学の作品、形式、ジャンル、歴史に関するより多くの知見が得られるだけでなく、文学史を思想史、学術史、文化史などと交差させながら考察することで、より広い文脈のなかで文学史をとらえられるようになるという。また彼は、本書は文学のなかの科学を扱っているものの、韓国科学の文化史にも寄与するであろうと附言している。



チョンジョンファン ソ ヨンヒョン イム テ フン
千 政煥・蘇榮炫・林泰勳ほか 編

『文学史以後の文学史—韓国現代文学史の解体と再構成』

(プルン歴史、2013年)

천정환・소영현・임태훈 외 편『문학사 이후의 문학사 - 한국현대문학사의 해체와 재구성』

(푸른역사, 2013)

本書は市民人文学講座を開いている団体の1つである「プルン歴史アカデミー」が2011年11月から2012年12月にかけて開催した講座の内容をまとめたものである。「文学史以後の文学史」というテーマにおいて、「文学」とは韓国現代文学を、「文学史以後」とはいわゆる「近代文学の終焉」ということが言われながら、もはや「韓国現代文学通史」が書かれなくなった時代を、それぞれ意味している。以前と比べて、文学の社会的位相が低下し、「近代文学の終焉」ということが言われるようになった時代のなかで、本書が目標としているのは、これまでの民族主義—男性—エリート中心の文学史が排除してきた「文学」に新たに焦点を当てることで、「複数の韓国文学史」の可能性を探ることである。超国家的現代文学の流通体系や現代的な大衆芸術、それらよりもさらに大きな文化史の流れのなかで成長してきた「ネットワークとしての韓国文学史」は、これらのもう1つの構図として存在している。

第1部「文学史を見る異なる観点」では、「文学史」に対して新たな問題を提起し、これまでの文学史では包括できなかった空間に問いを投げかけている。権ボドゥレは「文学の散布、あるいは文学の孤独」において、本書の序論のようなかたちで、韓国文学史の解体と再構成とに関する問題意識を整理した。彼女は大衆性、非同時的な存在の同時性、民族的境界、文学の境界といった枠組みに依拠しながら、「排除の体系としての文学史の原理」を明らかにした。千政煥は「サバルタン (subaltern) は書くことができるか」において、1970年代から1980年代の韓国文学史や「文学と政治」との関係に関する問題を慎重に読み直している。彼は文壇の有名作品だけでなく、例えば労働者の手記のような文章にも大きな文化史的価値が認められると述べ、このような認識をもとにすれば「文壇とエリート中心の文学史」は相対化され得ると述べた。蘇榮炫は「文学史の他者を顧みる」において、これまでの文学史では抜け落とされていた領域、青少年や女性を含む下位主体などに注目しつつ、「複数の文学史」を提唱している。

第2部「新たな問題枠組み (problématique) で読む韓国現代文学史の論点」では、既存のテキストや文学史を構成していた問題についての再解釈が集中的に行われているが、とりわけ文学、政治と現実がどのような相関関係を有しているかを明らかにすることに焦点が置かれている。李恵鈴は「植民地期の小説再読」において、植民地期を代表する作家の1人である廉想涉ヨムサンソプの小説を主たる分析対象とし、植民地朝鮮文学のなかで「描かれたもの」ではなく「描けなかったもの」に焦点を当てているが、このような視点は「民族文学史」のレンズのなかに閉じ込められていた我々に新たな問いを投げかけている。辛炯基シンヒョングキは「1960年代の『語り』と4・19、5・16における革新ディスコースの行方」において、4・19革命と5・16軍事クーデターを背景として、いわゆる「語り」について考察した。彼は集団のアイデンティティーや記憶の枠組みを作り伝承するようにする叙事体としての「語り」が、当代の支配的な文学とどのように影響を及ぼしあっていたのかについて述べている。権明娥クンミョンアは「文学『共同体』の部外者たちの

文学の話」において、規律であれ言語であれ、人間が耐え得る範囲のなかでは翻訳されることのできない情念、不可解なもの、恐怖の対象などの復元方法につき問題を提起している。

第3部「複数の文学史と他ジャンル」では、文学領域や、文学と影響を互いに及ぼしあってきた映画、ドラマ、音楽などを含む大衆文化領域との関係について再検討されるとともに、これらの作業を通じて複数の文学史が含むべき代案的内容が探られている。白文任は「文学史と映画史」において、植民地期の批評家であり詩人でもあった林和の、従来の研究ではほとんど言及されてこなかった領域である「映画論」の検討を通じて、文学と映像媒体との緊密な相関関係を明らかにした。李英美は「話し言葉の文学／書き言葉の文学、韓国文学史の新たな場の組み立て」において、1960年代、大きな人気を誇った映画や大衆歌謡を中心に「話し言葉の文学」を論じ、映画や演劇、放送劇、歌謡曲などのような「大衆文学」がなぜ文学史の構成要素になり得るのかを正面から扱っている。鄭ヨウルは「ファクション(faction) 共和国における歴史小説の読解」において「ファクト (fact)」と「フィクション (fiction)」との合成語である「ファクション」としての歴史小説や歴史ドラマから、大衆の政治的な夢などを読み解いている。彼女によれば『宮廷女官チャングムの誓い』や『根の深い木』などの韓国テレビドラマのシナリオを書いた金榮眩のような者こそ「立派な歴史家」である。

これらの筆者たちは、「文学史」の時間は単線的な構造によって作られるものではない、伝統的な「文学史」のテキスト選定や排除の根拠は完全に公正妥当であるというわけではない、といった認識が共通して見られると主張している。論文の著者は、本書が、未だかつてきちんと書かれたことのなかった東アジア文学史、大衆文学史、女性文学史、映像文学史、民衆文学史、翻訳文学史などのための認識論を作り上げるための契機となることを望んでいると語っている。

〔日本語訳 吉川絢子〕